ダークツーリズムからみた軍艦島の意義

古　賀　広　志

1　はじめに ── 産業遺産とツーリズム
2　石炭産業を支えた軍艦島と高島炭坑
3　産業遺産とダークツーリズム ── ダークツーリズムの視点からの考察
4　おわりに

1　はじめに ── 産業遺産とツーリズム

前章では、もう一つのツーリズム概念として悲しみの継承を目的とするダークツーリズムの考え方を紹介した。そこでは、ダークツーリズムの特徴として、①近代社会の意図せざる結果（陰）に「光」を当てる視座、②観光対象を行為遂行的に構成する態度、③身体性を通じた「まなざし」の獲得という３点を指摘した。それぞれは、観光資源の捉え方、観光対象に臨む態度、観光行為の特徴を示したものである。

本章では、このようなダークツーリズム概念の応用として、長崎市高島町の軍艦島（ただし、正式名称は「端島（はしま）」であり、以下、文脈に応じて表記を変える）と隣接する高島、中ノ島を取り上げることにしたい[1)]。なお、軍艦

1）江戸時代までの文献では、端島を羽島、高島を鷹島と表記するものもある。なお、軍艦島には、本研究班の調査の一環として、2021年３月29日、株式会社ユニバーサルワーカーズの主催する軍艦島ツアー（上陸・周遊プラン）に参加し、上陸する機会を得た。日程の都合上、高島に上陸できなかったことから、現地のフィールドを通じた報告は別の機会に行いたい。

島に関しては、既に多くの優れた研究が多数報告されている[2)]。そのために屋上に屋を重ねるという批判もあるかもしれない。とはいえ、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」の構成資産の一つとして世界遺産に登録され注目を浴びる軍艦島と、同様に世界遺産に登録された隣接する高島を比較しながら、ダークツーリズムの柔軟性や多様性を検討することは、ダークツツーリズム研究の発展において幾ばくかの貢献ができると期待できる。

軍艦島は、廃墟から世界遺産にイメージを大きく変え、多くの観光者が上陸するようになり、観光資源として成功したと言える。他方で、廃墟として語られることの多かった林立する鉄筋コンクリート集合住宅群が世界遺産の対象から外れており、劣化が進む中で、世界遺産とは異なる文脈から、その保存の在り方が議論されていること、さらに2021年７月22日、ユネスコ（UNESCO：国連教育科学文化機関）の世界遺産委員会によって文化遺産「明治日本の産業革命遺産」において、朝鮮半島出身の労働者を巡る説明が不十分だと指摘され、日本の今後の対応に注目が集まっている。このような諸要素をダークツーリズムの視点から分析し直すことは、少なくともダークツーリズムという分析装置の切れ味を確認する上では有益であると思われる。また、軍艦島に隣接する高島は、軍艦島と同時期に、同じく世界遺産に登録された高島炭坑跡をかかえる有人島である。無人化して廃墟となった軍艦島と異なり、炭坑閉山後の急速な人口減少と雇用問題を抱えながら、「石炭を魚に変えて島おこし」を旗印に、島の再生に取り組んでいる。軍艦島が無人化した廃墟からの世界遺産であるのに対して、高島は炭坑閉山から石炭に代わる産業の育成に取り組む中で、炭坑跡が世界遺産に登録された形である。本章では、両者を対比しながら、産業遺産に対するダークツーリズムのアプローチを検討することにしたい。

2）軍艦島そのものの報告書としては、阿久井・滋賀（2005）がある。また、ダークツーリズムからの議論としては、深見（2015）、木村（2014）、井出（2021）などがある。

2　石炭産業を支えた軍艦島と高島炭坑

⑴　軍艦島と高島炭坑の概要

議論を始める前に、軍艦島と高島、２つの炭坑の歴史について簡単に整理しておく[3)]。

まず、長崎市高島町（旧長崎県西彼杵郡高島町）の高島は、長崎市中心部から南西14.5kmに位置する島である。その大きさは、周囲6.4km、東西1.2km、南北1.8km、面積1.24km^2（甲子園球場の約3.4倍）である。ただし、もともとは、高島本島と上二子島・下二子島・浮島からなる群島であった。採炭技術を進める中で、排出されるボタを埋立てたことで、上二子島と下二子島と陸続きとなった[4)]。さらに、防潮堤兼桟橋によって浮島で陸続きとなり、現在の高島の姿になった。高島は、2005年に長崎市と併合されるまでは、日本で最も面積が小さく、人口の少ない町であった。

他方、軍艦島こと端島（長崎市高島町）は、長崎市から南西約19キロメートルの海上に位置する[5)]。端島は、もともとは南北約320m・東西約120mの岩礁と砂州で構成される小さな島であった。大きさは、現在の約1/3であった。ところが、後述するように埋立と護岸築造によって面積を拡大してきた。島の西側は外洋に面し、厳しい波風にさらされている。他方、東側は半島に面した内海である。そのため、波は比較的穏やかで、北東端には砂浜（用度浜）があったと言われる（池上, 2010, p.36）。

さて、この「島（軍艦島）」で石炭が発見されたのは、1810年のことである。

3）以下の記述は、阿久井（1995）、後藤・坂本（2005）、木村（2014）、加地（2015）、NPO西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編（2015）、中村（2020）などを参照した。

4）ボタとは、炭鉱で石炭や亜炭の採掘に伴い発生する捨石のことである。九州本土ではボタを集積したボタ山が作られたが、離島では埋立に利用された。

5）端島は、長崎県西彼杵郡高浜村に属する島嶼部であったが、1955年、高浜村の端島以外の地域が隣接する３村と合併して「野母崎村」となり、端島（高浜村端島名）は高島町と合併して、改めて高島町が発足した。

江戸時代後期には、地元の漁師たちが漁業の傍らで露出炭を採る「磯堀り」が行われていた。本格的な採炭は、明治になってからである。そして、端島の採炭が本格する背景には、端島の東北3 kmに位置する高島の炭鉱技術が導入された後のことである。そこで、高島炭鉱の歴史を簡単に紹介することから議論を始めることにしたい。なお、以下では、両者の炭鉱開発を次の4期に分けて整理することにしたい[6)]。

① 初期拡大期：1914年まで（ホブズボームの「帝国の時代」に相当）

② 戦前高出炭期：1945年まで（ホブズボームの「破局の時代」に相当）

③ 戦後高出炭期：1973年まで（ホブズボームの「黄金の時代」に相当）」

④ 閉山から世界遺産登録まで（ホブズボームの「危機の時代」以降に相当）

ただし、ここでは第3期までを取り上げることにし、以下では、3つの時期について説明していく。

⑵　高島炭坑小史

高島で石炭が発見されたのは、今から三世紀以上前の1695年である[7)]。端島での石炭発見よりも一世紀以上前の元禄の頃であった。その後、幕末に開港された長崎に外国から蒸気船が寄港し始めると、燃料としての石炭の需要が高まり、炭鉱開発の必要性が認識されるようになる。そこで、高島の石炭が注目されたのである。

⑵a　初期拡大期：三菱誕生の背景

高島炭坑の初期拡大期（1914年まで）の特徴は、①外国資金と近代技術の導入、②間接雇用制度と労働争議、③三菱による買収にある。

6）三菱マテリアルのWebサイトも同様に4期に分けて端島炭坑の歴史を説明している。2021年8月15日確認）。http://carbide.mmc.co.jp/magazine/article/vol07/16242

7）発見者の名前は「平戸の五平太」と伝えられる。当初は、伊万里焼や波佐見焼の窯の燃料に使われたり、塩作りの燃料として利用されていたと言われる。

江戸時代の長崎県は、幕府直轄地である天領と佐賀・大村・島原・平戸などの諸藩に分かれていた。高島は、佐賀藩（藩主が鍋島家であったことから「鍋島藩」とも呼ばれる）の所領であった。1868年、佐賀藩は、グラバー商会との合弁事業として高島の海洋炭鉱開発に着手した[8)]。グラバー商会は、英国人技師の招聘、外国からの資本調達など炭鉱事業に尽力した。その結果、1869年、日本初の蒸気機関を利用した洋式竪抗が完成した。世界遺産に登録された北渓井坑（ほっけいせいこう）である[9)]。同抗は、日産300トンの出炭量を記録した。しかし、1876年に海水が侵入したことから廃抗になった。

1974年、高島炭坑は官営となり、輸出可能な事業となった。しかし、同年末に後藤象二郎が率いる蓬莱社に払い下げられ、再び民営企業に戻った。事業を継承した蓬莱社は、ジャデーン・マセソン商会から資金援助を受けたが、事業は苦境に立たされた[10)]。１つは事業そのものが大きな赤字を抱えたこと、もう一つは、労働問題であった。とくに、後者の問題は深刻であった。

日本初と呼ばれる労働争議は、高島炭坑の払い下げを受けた４年後（1878年）に起きた。それは、①納屋制度、②それに伴う低賃金に苦しめられた鉱夫（炭鉱労働者）の怒りが爆発したのであった[11)]。労働争議は操業の支障となり、結果

8）鍋島藩とグラバー商会は、炭坑事業の運営者である深堀鍋島家に相談もなく合弁計画を進めた。そのため、代償金を巡って深堀鍋島家と藩の論争になった。1978年、藩は代償金三万両を支払った。これを資金に深堀鍋島家は周辺の島々の炭坑開発を行った（中村，2020, pp. 59–60）。また、江戸後期から明治初期頃の日本式炭坑の様子、イギリス人技師の指導、販路開拓と資金提供に尽力したトーマス・ブレーク・グラバー（Thomas Blake Glover）ら外国人商会などの貢献については、菊野（2017）が詳しい。

9）ここで、炭坑と炭鉱の相違を確認しておく。炭坑とは「石炭を掘り出す穴」のことで、垂直に掘られた穴を「竪抗」、水平に掘られた穴を「横抗」という。炭鉱は「石炭を掘り出す区画」を指す。そこで、炭鉱開発のために炭坑を建設（掘削・掘鑿）するという表現となる。

10）1870年に、ジャデーン・マセソン商会の長崎代理店であったグラバー商会が破産したことから、資金援助を本国の親会社に依頼した。

11）鉱夫（坑夫と表記されることもある）は、採炭作業に従事する労働者のことである。戦後になると、「鉱夫」ではなく「鉱員」と呼ばれるようになる。鉱員には、機械設備の保全などの坑外業務従事者を含むが、いずれにせよ現地採用の労働者を指し、職員（本社採用者）と区別された。

的に赤字を増長することになった。

炭鉱の労働問題において、納屋制度を避けては通れない。そこで、簡単に納屋制度について紹介しておきたい。当時、炭坑では、鉱夫を直接雇用するのではなく、今でいう「派遣労働」に頼っていた。派遣会社に相当する「納屋頭」に依頼する間接雇用が常用されていた。鉱夫は、納屋と呼ばれる合宿所に寄宿し、生活と労働を納屋頭に厳しく管理された。ただし、納屋制度は、九州地方の炭鉱業で用いられた表現である。一般には「飯場（はんば）制度」と呼ばれた。広辞苑を繙けば、飯場制度は「明治以後に行われた労務管理制度の一類型。資本家の指図により飯場頭（納屋頭）が労務者を飯場に合宿させて監視し、賃金の上前をはね、また暴力的制裁を加えるなど、前近代的な搾取を行ったもの」と記されている。実際、炭坑現場でも暴力や搾取は珍しくなかった。そのような過酷な労働状況を嘆いた唄として、「一に高島、二に端島、三で崎戸（さきど）の鬼ヶ島」が伝承されている[12)]。いずれも長崎西彼杵郡（当時）の炭坑の島である。

さて、労働争議と経営不振に喘ぐ蓬莱社の危機に手を差し伸べたのは、福澤諭吉であった。後藤の政治家としての将来を案じた福澤は、岩崎彌太郎に高島炭坑を買い取るように仲介した[13)]。その結果、1881年、高島炭坑は三菱に買収された。高島炭坑買収後の三菱は、精力的に技術者を採用した[14)]。近代的な採炭技

12）上野（1967）による。また、柴田（2010）は、この歌は、朝鮮人労働者や中国人捕虜が虐げられた状況を謳ったものとして紹介した上で、当時の過酷な状況について「語られはしてもその全容を示す正確な記録・証拠は見つかっていない」と指摘した（柴田, 2010, p. 69）。

13）岩崎彌太郎は、①譲渡額が交渉を通じてつり上げられたこと、②売却にかかわらずグラバーを雇用する契約になっていたことを三菱側に伝えられていなかったことから、後藤象二郎と仲介を申し出た福澤諭吉に不信を募らせていたと言う（中村, 2020, pp. 65–75）。後藤の娘婿であった岩崎彌之助（彌太郎の弟）は、高島の推定埋蔵量、出炭予想、収支予想、既存施設の資産価値、三菱の船腹を利用することの意味、石炭販売の利ざやなどを総合的に評価した上で、「買収すべき」と理詰めで彌太郎に進言したという。結局、破談寸前になったものの買い取り契約が成立した。

14）三菱の社名は、郵便汽船三菱、三菱社、三菱合資会社など変遷するが「三菱」と統一的

術を取り入れた三菱は、その後、端島炭鉱を買収し高島炭坑の支鉱とした。

ただし、三菱経営下になっても、高島炭坑の過酷な労働実態は変わらなかった。上述の納屋制度のために、鉱夫の労務管理は納屋頭に委ねていたことが大きな原因であった。やがて鉱夫のおかれた惨状を内部告発する声があがった。その声は、新聞雑誌が大々的に報道したことで、広く社会問題として認識された[15)]。1887年から翌年にかけてのことである。結果的に、高島炭鉱は、争点となった納屋制度を廃止した。時に1897年、炭鉱としては日本で最も早いと言われている[16)]。

(b) 戦前高炭出期：海から陸へ

高島炭坑、そして後述するように端島炭坑の買収によって、三菱は、海から陸へ事業を大きく転換した。三菱は、藩船三隻を借り受けて始めた海運業を中心に成長を遂げてきた。ところが、1881年（明治14年の政変）、三菱の後ろ盾となっていた大隈重信が失脚すると、三菱の独占に対する批判が高まり、同年に

に表記する。なお、高島炭坑を買収した後、三菱は、コロンビア大学で鉱山学を学んだ長谷川芳之助（日本初の工学博士と呼ばれており、後に八幡製鉄所の創設に尽力した）、南部球吾（後に高島炭坑坑長や本社鉱業部長兼炭坑部長を歴任した）、工部大学校卒の松田武一郎（後に筑豊炭鉱で活躍）、大木良直（後に端島炭鉱長をつとめた）らを採用し、お雇い外国人技師のもとで先進的技術を学ばせた。三菱の技術者が、その後の産業発展に貢献したことは特筆に値する。また、他の企業と比較すれば、三菱の特徴は、「技術者のほとんどが大学鉱山冶金科卒業生で占められてい」たこと、三菱の「鉱山部では技術者が優位」であった（内田, 1976, pp. 15–16）。

15）佐藤（1998）によれば、「1887年11月頃より、福陵新報（後の西日本新聞）、東雲新聞（大阪で創刊された自由民権派の新聞、中江兆民が主筆で人気を博したが、1891年に廃刊）が報道を始めた。1988年６月に、国粋主義を掲げる政教社の雑誌『日本人』で取り上げられたこと（松岡好一による「高島炭礦鉱の惨状」）を契機に、社会問題化し、多くの新聞雑誌がこぞって報道することになった。高島炭坑の現状を報告する現地視察記事が「朝野新聞（犬養毅記者、1888年８月29日から９月13日）」、「東京電報（柴四郎、1888年９月12日から10月５日）』などに掲載された（高井, 2003, p. 26）。しかし、1888年10月頃には報道は下火になり、福陵新報以外は取り上げなくなった。高島炭坑事件は、メディアによって社会問題が構築される事例として捉えると、大変に興味深い。

16）高島炭鉱における納屋制度の解体過程については、村串（1974）など労務管理論や経営史の研究領域で詳しく検討されている。

反三菱の渋沢栄一らによる半官半民の「共同運輸会社」が設立され、激烈な競争を展開した。結局、1885年、両者が合併し「日本郵船」が設立される。岩崎彌之助は、「国家の大系」のために、海運部門を切り離した。結果的に、三菱は、海運業から鉱業（高島炭坑）と造船（長崎造船所）を二本柱とする多角化路線を歩むことになる。

高島炭鉱の石炭は良質であり、「黒いダイヤ」と呼ばれた。高島炭坑は、ホブズボームが指摘する「破局の時代（1914年～1945年）」を「産業報国戦士運動」として支えてきた。ただし、後述するように、次第に端島坑が高島炭坑全体を支えることになる。そのため、高島坑と端島坑を地下隧道で連結するという計画が検討された。しかし、労働組合の反対から頓挫したという[17]。

(c) 閉山に至る道

ホブズボームが指摘する「黄金の時代（1945年～1973年）」は、高島炭鉱においても、黄金期であった。その象徴は、1965年に完成した二子竪坑である。竣工費160億円と呼ばれる同坑は、深部区域の採炭を実現するために、深さが966mあった。同坑が開削されたことで、高島炭鉱は、日本有数の海底炭田となった。その成果は、翌年に現れた。最高出炭量となる154万トンを記録した。出炭量の増加は、人口増につながった。1968年には、高島の人口は18,019人を数えたという。

しかし、黄金の時代は、ホブズボームが指摘するように、1973年に幕を閉じることになる。1973年、高島炭坑の象徴とも言える二子竪坑が放棄されたのである。同坑は、傾斜がきつく、地下深部ゆえに高温であり、しかも「ガス突出」

17）中村（2018, p.5）からの孫引きであるが、1817年の「高島炭坑端島支坑報告書」に「端島坑の石炭質が優れていること、島周辺に大断層はあるが断層先の探炭に成功し、採炭量も豊富で確実性が高いことが、高島炭鉱が端島坑に多額の整備費用を投じることは当然で、高島炭鉱の将来は端島坑に依存している」と記載がある。

が相次ぐという悪条件が重なったからである[18]。そのためか、高島炭坑の出炭量は、最高を記録した1966年をピークに、次第に低下していった。さらに、国の石炭政策が大きく変わったことも追い打ちをかけた。石炭から石油にエネルギー需要が変化したためだ。

1978年、ついに出炭量は72万トンにまで落ち込んだ。従業員は1966年の約3000人から1978年は約1070人に、ほぼ1/3に減少した。閉塞する状況に、最後の一撃を加えたのは、事故であった。1985年、坑内で爆発事故が起きたのだ。致命的な損傷を受け、翌年、高島炭鉱は、100年を超える歴史に幕を下ろすことになった。閉山は、1986年11月27日であった。1986年は、元号で言えば「昭和61年」である。まさに昭和の終わりであった。三菱による買収が1881年は、元号で言えば「明治14年」である。このことから、明治・大正・昭和を支えたと言うことができよう。

⑶　端島炭坑小史

端島が炭鉱開発に着手するのは、高島の炭鉱開発から四半世紀ほど遅れてのことであった。前述のように、江戸時代後期は、露出炭を採掘するだけで、本格的な採炭は行われていなかった。1886年、36mの竪抗が開削されたことで、ようやく本格的な採炭が始まった。

⒜　炭坑事業の拡大と埋立による島の拡大

初期拡大期の特徴は、資本主義の進展にある。この時期、端島炭坑は、採炭技術の近代化を精力的に進めながら、炭坑事業の拡大が図られた。この点に注目しながら、端島炭坑の発展を簡単に振り返ってみよう。

18）出炭量減少の背景として、①高島炭鉱の傾斜角が大きいために機械化が困難であった、②高島の採炭期間が長かったことから採炭現場が遠距離であった（入坑から現場の往復だけに160分を要した）、③坑内のガス突出が多かった（後の事故につながる）ことなどが指摘されている（西原，1998，p.7）。

端島では、上述のように、露出炭が発見された後も、漁師が副業的に露出炭を掘って販売する程度で、本格的な採炭事業に至らなかった。その後、採炭に着手する業者がいたが、すぐに廃業した。その後も数社が採炭に挑戦したが、台風被害などで長続きしなかった。

端島に転機が訪れるのは、1890年のことである。高島炭鉱を運営する三菱に島全体が譲渡されたのだ。元佐賀藩深堀領主鍋島孫六郎が三菱（岩崎彌太郎）に10万円で売却した[19)]。その結果、端島は高島炭坑の支鉱（高島炭坑端島坑）となった。本格的な採炭が開始されるのは、翌年になってからである。なお、この年、蒸留水機が設置され、島内に設置された住宅棟などに飲料水が配給されるようになった[20)]。外洋に浮かぶ岩礁であった端島において、真水の供給は、台風対策（後述）とともに重要な課題であった。また、海水の蒸留過程で製塩も行われた（塩は市場に出荷され販売された）。

事業が本格化し島に居住する労働者が増えたことで、三菱は1893年11月３日、小学校（三菱社立端島尋常小学校）を設立した。同年に着手された第二竪坑が1895年に完成、翌年には第三竪坑も完成するなど精力的な炭鉱開発が行われた。

採炭量の増大にともなって、島の周囲が段階的に埋め立てられ、あわせて護岸工事が行われた。埋め立ては都合６度に及んだ。ただし、最も古いものは、三菱買収以前に行われた。三菱は、1897年から1907年までに５回の埋立を行った（中村，2018，2020）。大正期までは、護岸築造に「天川（あまかわ）技法」が用いられた[21)]。それは、石灰と粘土（赤土）を混ぜて石材を固める漆喰工法である[22)]。草木のない岩礁であった端島は、周辺の埋め立てと護岸堤防の拡張を繰

19）上述の三菱マテリアルのWebサイトによると、現在の20億円に相当するという（記載時期は不明）。

20）海水の蒸留装置は、1935年まで利用された。

21）中村（2018）は、各種資料を突き合わせて、埋立年度（1897年、1899年、1900年、1901年、1907年）を明らかにした。しかし、護岸に関する補修・補強工事や再構築についての記録が乏しく、施工時期を明確化することは難しい（清宮ほか，2013，p. 976）。

22）一部では、高価なセメントが使用されたようであるが、基本的には、天川技法で建造された。昭和に入るとコンクリートが利用された。コンクリート護岸が外洋の波の激しい場

り返すことで、その姿を大きく変貌させてきた。その結果、現在の島の形状になった。天川技法による護岸は、さらにコンクリートで補強されている。しかし、暴風などでコンクリートが剥がれた部分から天川を観ることができる[23)]。

埋め立て工事が開始された1897年は、納屋制度（前述）が廃止された年でもある。先の高島炭鉱に遅れたものの、端島炭鉱においても段階的に納屋制度が廃止されていった。このことは、資本主義が進み、近代的な雇用関係が出現したと理解できる。納屋制度が全廃されたことから、鉱夫は、納屋（合宿所つまり居住地）から退去しなければならなくなった。そのために、三菱にとって、住宅の手当が喫緊の課題となった。三菱は、タコ部屋と揶揄された従来の狭隘な住環境のままでは鉱夫を確保できないと考えた。そこで、住宅用地を確保するために、島の南部および南西部を埋立てることにした。そして、新しくできた土地に鉱夫向けの住宅が建設された（中村，2018，p. 6）。納屋制度廃止時には34棟であった社宅は、104棟まで整備されることになった。労働環境の近代化が始まった。

しかし、順調に住宅建設が進んだ頃に、思わぬ陥穽があった。台風被害である。災害は忘れた頃にやってくる。1905年、ポーツマス講和会議が開催され、ようやく日露戦争が終結しようとする転機の年に、激しい台風が端島を襲撃した。竣工された社宅のうち30棟が全壊、９棟が半壊という甚大な被害を受けた。戦争終結は「特需」の終わりを意味する。景気は反動で低迷した。不況から労働争議が活発化した。そこに、台風の被害である。三菱は、労使調整に尽力せざるを得なかった。とはいえ、労働環境が改善されるには時間を要した

諺に「泣きっ面に蜂」とある。台風直撃から９年後に1914年、端島に再び台風が襲撃した。しかも、６月・７月・８月と台風が立て続けに端島を襲った。

所で長期的に利用された希有な事例として，軍艦島はコンクリート工学者の間で注目されてきた。

23）注１で言及した軍艦島ツアーでは、ツアーガイドから「世界遺産は明治期の構造物ですから、天川技法の護岸を見逃すと世界遺産を観たとは言えませんよ」と説明を受けた。

７月、三菱の岩崎久彌（第三代）社長が最初の台風の被害を視察に長崎を訪問した最中に、二度目の台風が長崎を襲った。三菱は、急遽、台風対策費を計上することになった[24)]。端島には、鉱夫住宅として、当時は珍しかった鉄筋コンクリート集合住宅（４階建て）の建設費、および被害復旧工事費と南護岸工事費を予算化された。

⑹　技術革新と労働力の確保

高島炭坑の第２期は、ホブズボームが「破局の時代」と呼んだ「技術革新と戦争」の時代である。この時期の特徴は、なによりも、採炭技術の向上にある。実際、1841年までの端島炭坑の出炭量は、年間10～20万トンであった。ところが、技術革新によって、年間40万トンを超えるようになった。この高出荷は、敗戦まで続いた。良質の石炭は、主に八幡製鉄所の製鉄用原料炭として出荷された。

技術革新は、採炭技術だけでない。試行錯誤の中で、鉄筋コンクリート技術が実用化された。1916年、日本で最初の鉄筋コンクリート集合住宅（30号棟：グラバー住宅）が竣工した。現在は、「廃墟の象徴」として「第３見学所」の見所になっている同棟は、竣工時は４階建て（一部は半地下）であったが、後に７階建てに増築され、結果的に、145戸の高層住宅となった[25)]。同棟は、ロの字型で正方形の中庭を囲む形で住居が配置されていた[26)]。間取りは、１Ｋ（六畳一間と四畳一間があった）、キッチンと言っても「かまど」だけで「流し」は吹き抜けの廊下に共同で設置された。トイレは各階で共同、風呂は島内の共同風呂

24）岩崎社長が被害状況の視察に訪れたのは、長崎造船所であったと言われる。

25）中村（2018）は、狭い島内で居住空間以外の空き地を確保するために、４階建てを７階建てに高層化したのではないかと指摘し、劣悪な労働環境が議論される中で、婦女労働を促進するためには、都市化は不可欠だったと主張した。

26）採光に工夫したと言われるが、「下層階には陽もささず、湿気と臭気がひどい」とも指摘されている（NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編，2015，p. 44）。

を利用した[27]。なお、同棟の鉄骨には炭鉱施設の廃材が転用され、砂利には対岸の高浜のものが用いられた（剥落した壁には、多くの貝殻が埋まっているという）。

当時、鉄筋コンクリート建築は試行錯誤の段階であった[28]。このことは、30号棟の着工前年に建設された旧14号棟（５階建て）の建築方法からも窺うことができる[29]。同棟は、床と屋根にコンクリートを使用しているが、基本的に木造であった。なお、中村（2018, 2020）は、端島での鉄筋コンクリート建設技術が三菱が所有していた「丸ノ内」の開発に大きく貢献したと指摘する[30]。

ところで、軍艦島という通称が生まれたきっかけは、1916年の大阪朝日新聞が「之を偉大なる軍艦とみまがふさうである」と報じたからだと言われる[31]。現在では、端島という正式名称よりも、通称である「軍艦島」の方が人口に膾炙しているが、その端緒は、30号棟をはじめとする初期の鉄筋コンクリート集合住宅群の建築時期にあった。整備された人工護岸と高層構造物のシルエットが軍艦に見えたのだろう。ちなみに、軍艦島にモデルとなった軍艦は、三菱造船

27）鉱夫と職員には、それぞれ専用の風呂があり、鉱夫の家族を対象とする共同風呂が３箇所あった。

28）日本における最初の鉄筋コンクリート建造物は、1905年、佐世保港内の潜水器具庫と言われる（ただし、主体構造のみが鉄筋コンクリートで、柱間は煉瓦積み）。鉄筋コンクリートのみで建築された最初の建物は、1908年、神戸（和田岬）の東京倉庫である（三菱の物件、ただし平屋建て）。1916年は、東京でも平屋が多かった。そのような時期に、鉄筋コンクリート集合住宅が建設されたことは、特筆に値する。なお、都内に鉄筋コンクリート造の集合住宅が建築されるのは、1923年である。30号棟をはじめ軍艦島の住宅群を高く評価する建築学者は多く、保存運動が何度も議論されている（野口ほか, 2018）。

29）1941年に新14号棟（鉄筋コンクリート５階建ての職員住宅）が建設されたため、旧14号棟と呼ばれる。ただし、棟の号番号は任意で付けられたようである。

30）明治政府は、陸軍の兵営を麻布に建築する費用を調達するために、丸の内の土地約13万５千坪の売却を決定した。しかし、入札価格が政府の希望額を下回ったために、松方正義蔵相は、岩崎彌之助に買取を懇願した。その結果、丸ノ内の土地は三菱の所有となり、その都市開発に鉄筋コンクリート建設技術が重要な役割を果たしてきた。中村（2018, 2020）は、三菱の鉄筋コンクリート技術者の流れを丹念に追いかけ、端島と丸ノ内のつながりを明らかにした。

31）大阪朝日新聞（大正５年４月７日付け）の記事。

（長崎）で建造された悲劇の戦艦「土佐」と言われている[32]。

その後、端島は、その姿を軍艦に近づけていく。ただし、シルエットとしての軍艦は、実は「社宅」をはじめとする都市機能の建物が演出したものであった。まず、鉱夫を対象とする住宅群が立て続けに建設された。1918年には、16号棟（66戸）、17号棟（54戸）、18号棟（50戸）、19号棟（45戸）、20号棟（26戸）が竣工された。当時の鉱夫の給与が「日払い」であったことから、これらは「日給住宅」と呼ばれた[33]。結果的に、古い宿舎の移転や建替・増築が段階的に進められ、日給住宅のすべての工事が完了したのは、1928年であった。

加えて、軍艦島は、都市機能を充実させていった。1921年には、前述の三菱社立端島尋常小学校が高浜町に移管され、町立小学校になった。後に高等小学校も併設され、1947年の学制改革で、中学校を併設された。さらに、宗教施設である寺院（泉福寺：23号棟）が1921年に、遅れて1936年に神社（端島神社：１号棟）が建設された。昭和に入った1927年には、映画館（昭和館：50号棟、煉瓦造２階建て400席）が建設された[34]。ただし、火葬場と墓地は島内にはなく、

32）軍艦「土佐」は、旧日本海軍の戦艦である。当時、いわゆる八八艦隊（戦艦８隻・巡洋戦艦８隻）を構想し、その２番艦として、三菱造船長崎造船所（現・三菱重工長崎造船所）で起工された（1920年２月16日）。その後、1921年１月、航空母艦への改造案が構想されたが、決定が下される前の同年12月に進水式が行われた（進水を祝うくす玉が割れなかったことから縁起が悪いと懸念されたという）。ところが、進水式から僅か３ヶ月後の1922年２月に締結されたワシントン海軍軍縮条約を受け、建造中止となった。大阪朝日新聞が「軍艦のようだ」と報じた当時、端島では、街区が整備された頃で、日本初の鉄筋コンクリート構造の集合住宅（７階建ての30号棟）が完成した年であった。未完成の軍艦「土佐」は、砲台などが設置されておらず、その姿は当時の端島に似ているように見える。なお、建造中止が決定した軍艦「土佐」は、海軍の砲弾実験などに用いられた後、1925年に高知沖で自沈処分された。

33）三菱の職員の給与は月給制度であった。また、職員住宅と鉱員住宅は異なる建築物であった。なお、鉱員は、三菱礦業高島炭坑端島坑の現地採用の労働者を指し、採炭作業者だけでなく、機械整備などの坑外労働者も含まれる。鉱員と職員の住環境の相違については、柴田（2010, pp. 62–63）に詳しい。また、後に本文中に引用するように、端島の生活環境を調査した方寄は「社会階層と居住空間が明確にリンクしている」と指摘した（NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編, 2015, p. 131）

34）穿った見方かもしれないが、敢えて言えば、寺社や映画館を「戦意昂揚」の施設と捉えると、やはり「破局の時代」を特徴づける施設といえるだろう。

隣の中ノ島に設置された。後述するように、炭質が悪い中ノ島坑は早々に閉鎖されていたが、そのまま三菱が所有していた。端島からの距離の近さから、中ノ島は、端島の「都市機能」を補完する外延として利用されたのだ[35)]。

繰り返しをいとわず強調すれば、このように鉱夫の住環境の整備、就労条件の改善が進展した背景には、納屋制度の廃止にともなう鉱夫確保の困難性が深く関わっている[36)]。実際問題として、労働力確保は大きな課題であった。その解決策の一つは、婦女の活用である。前述の30号棟が着工された1916年より、少年と婦人の坑内作業が行われるようになった。つまり、都市機能の充実の背後には「婦女子が生活しやすい環境を整えることで労働力を確保したい」という思惑が見え隠れしていた。

しかし、婦女子労働だけでは人員不足を解消できなかった。そこで、朝鮮半島出身者の使役が始まった（建前として「内鮮融和」が謳われた）。いわゆる「徴用工」である。1939年には、朝鮮人労働者の集団移入が本格化した。彼らは、日本人が忌避する最重労働を担ったと言われる[37)]。さらに、1943年には、中国人捕虜の強制労働が行われるようになった[38)]。彼らは、日の当たらない半地下にすし詰めにされた。現在の「第３見学所」の近くのプール跡（当時は南部運動場）が中国人捕虜の収容所となった（加地，2015，p. 32）。軍艦島上陸ツアー

35）ただし、無縁仏は泉福寺に納骨された。

36）労働条件の改善については、高島炭鉱事件の影響が大きい。また、工場法が1911年に制定、1919年の鉱夫労役扶助規則の公布などの各種法令の整備、そして1922年の納屋制度廃止の国会決議などにより、労働条件が大きく改善された社会的背景を指摘しておきたい。また、納屋制度では、鉱夫が納屋で共同生活をすることから、団結して労働争議を引き起こしやすいと考え、個別の住居を与えることで団結力の脆弱化を意図したと言われる（後藤・坂本，2005，p. 37）。

37）炭鉱労働者だけでなく、いわゆる「酌婦」もいた（柴田，2010，p. 69）。もちろん、日本人の酌婦もいたが、売春禁止法によって、31号棟近くに３軒あった遊郭（最盛期には酌婦は30人を超えていた）は姿を消したと言われる（NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編，1995，p. 130）。

38）裁判などで「強制労働」という表現が用いられることが多いが、それ以外の場面では「徴用」という表現が用いられることもある。ここでは「強制労働」と表記したが、用語の適切性というよりも便宜上、裁判などの表記にあわせただけである。

では、ガイドが、プールがあった時代の「水着姿でプールに向かう少女」の写真を掲げ、「廃墟となった現在から、四十年前には、こんな風景があった」と語りかけることがある（坂本, 2015, p. 60）。しかし、そのプール跡は、1944年頃までは「運動場」であり、戦時中は「中国人捕虜収容所」であったことが語られることは少ない。帝国の時代から破局の時代になっても、かつての納屋制度が、そこにだけ残っていたのだ[39)]。

そのため、中国人捕虜や朝鮮半島出身者にとって、軍艦島は、世界遺産でも廃墟でもない。懐かしい「昭和」の情緒もない。軍艦島は、ただ思い出したくない「悲しい場」に過ぎない。言葉を換えれば、軍艦島は「地獄島」であり「監獄島」に他ならないのだ。これが、もう一つの軍艦島の姿である[40)]。時代は、まさにホブズボームの指摘する「破局の時代」のまっただ中であった。

ところで、1941年（開戦の年）、端島炭坑もまた「産業報国戦士運動」を展開した。その結果、年間最高出炭量（約41万トン）を記録した。しかし、この時期の生活環境は劣悪を極めたと言われる。とはいえ、戦時中にもかかわらず鉄筋コンクリート集合住宅（第65号棟：報国寮）が竣工されるなど軍艦島は特別な存在であった。納屋制度の廃止を契機とする近代化の流れは、採炭技術の革新と鉄筋コンクリート建設技術の開発、労働力確保の容赦ない手段の展開などにつながる。これらは、まさに戦時体制を顕現したものであった。

(c) 社宅街の形成：戦後高出炭期

戦後から1973年までの期間を、高島炭坑の高出炭期として捉えることができ

39）中国人捕虜のおかれた過酷な労働実態については、柴田（2010）を参照されたい。なお、当時の労働者と遺族が三菱礦業の後継会社である三菱マテリアルを相手に謝罪と損害賠償を求めた裁判が行われている。裁判結果を議論する力量を筆者は持ち合わせていないので、ここでは、裁判が行われたことのみを指摘しておく。

40）朝鮮半島出身者に対する虐待などについて、「真実の歴史を追求する端島島民の会」は、それは「真実ではない」と主張し、「軍艦島は地獄島ではありません」という意見広告を新聞に掲載するためにクラウドファンディングを利用した（URL は、2021年 8 月15日確認）。https://readyfor.jp/projects/gunkanjima

る[41)]。ホブズボームが「黄金の時代」と呼んだ時期であり、端島では「都市化」がキーワードとなる。

ところで、その前に大きな出来事を看過することはできない。それは「敗戦」である。敗戦により、朝鮮人労働者や中国人捕虜が解放された[42)]。その影響もあってか、端島の人口は減少した。ただし、国勢調査と高島町端島支所の人口数に大きな乖離があり、正確な人口を確定することは難しい[43)]。

戦後、労働力不足を解消するために、炭鉱には優遇策が採られた。米の特別配給や酒が購入可能などである（加地，2015，p. 63）。外地からの引揚者を炭坑に就職させるための方策であった。配給優遇策に加えて、給与の高さもあり、軍艦島は、多くの人を魅了した。また、長年の懸念であた真水問題も解消した。1955年に、海底水道が開通し、真水が安定して供給されるようになったのだ[44)]。その結果、1960年には、端島の人口は5000人を超えた。人口密度は、東京特別区の９倍を超え、世界一を誇った。

増え続ける人口に対応するために、鉱員社宅や独身寮が増設された（31号棟、

41）方寄俊秀は、1945年−1965年を戦後再出炭期、1965年−1974年を再建・終結期に分けたが、本稿では、ホブズボームの時代分類を採用したい（NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編，2015，pp. 126−131）。その理由は、終結期は「黄金の時代」の延長線上に位置づけることができるからである。政策転換による変化という側面は、他方で「黄金期」を支えた論理であり、衰退期もまた，同じ論理が逆に機能したと考えれば、高出炭期と再建・終結期における端島の経済論理は表裏一体の関係にあり、次元が異なるものではない。なお、方寄の論考の初出は1974年であるが、NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編（2015）に収録された再掲論文のみを参照した。

42）柴田（2010）は、『高島炭礦史』には「朝鮮人労務者は輸送の関係から逐次送り出し、全員（ママ、柴田は45年と注をしているので「前年」の誤記か：筆者注）10月末までに全員を帰還させた」、「中国人労務者、11月19日に退島し、佐世保港より（中略）帰国の途についた」との記載に疑義を呈し、軍艦島の案内役をつとめる加西よう子の「端島では中国や朝鮮の人たちが強制連行され、過酷な労働で亡くなった。原爆投下後、長崎市内に送り込まれて遺体などの後片付けをさせられ、入市被爆した」という発言（長崎新聞の記事）を紹介し、敗戦直後の対応についての事実解明の必要性を訴えた（p. 71）。

43）柴田（2010）は、本稿の第２期にあたる端島の人口は、概ね3300人前後であったが、敗戦直後は2743人となったと記述している（p. 62）。

44）上述のように（注20）、1935年移行は、輸送船による給水体制がとられた。そのため、時化で船の運行が止まると水不足となり、共同風呂は海水が使われたという。

48号棟、51号棟、67号棟など)。また、既存の住宅等の屋上部分にプレハブが増設された(59号棟、60号棟、61号棟)。これらの住宅棟の1階部分には、パチンコ屋・雀荘などの遊興施設、個人商店、三菱直営の購買所や労働組合が経営する生協の売店などが開設された[45)]。端島小中学校の校舎(70号棟、71号棟)も建て替えられた。それにともない教員住宅(ちどり荘、13号棟)も建設された。さらに、公民館(39号棟)、病院(高島鉱業所端島病院:68号棟、隔離病棟:69号棟)などが作られ、端島最大の住宅棟65号棟の屋上には「幼稚園」が開設された。

このように都市機能を充実させていった軍艦島には、「緑と火葬場と墓がない」といわれた。とくに軍艦島を舞台とする映画「緑なき島」の影響もあり、緑がないことを気にした島民は、せめて子ども達に植物の姿を見せたいという思いから、住宅棟(16号棟、17号棟、18号棟)の屋上には「庭園」を作った。1963年頃からつくられた屋上庭園は、「屋上緑化の原点」であり、温度対策の「はしり」と言える(後藤・坂本, 2005, p. 16)。庭園で用いた「土」は住民が島外に出かけたときに少しずつ持ち帰ったという。水田も作られ、収穫祭は多くの住民で賑わったという。

以上のように、ホブズボームがいう「黄金の時代」に、端島は「都市機能」を充実させた。ただし、軍艦島は、匿名性を特徴とする都市ではない。それは、三菱の社宅街というべき存在であった。労働者としての生活だけが営まれる職場に居住する特殊な街であった。そのために、職業生活の終焉を意味する火葬

---

45) 開設時期を確認できなかったが、飲食店や理髪店・美容院なども軒を並べていた。また、前述のように「遊郭」も存在した。社交場としてのスナック(白水苑)、映画館「昭和館」は戦前に建設されたもので、中村(2018)は、婦女労働を推進する中で生活環境の整備の必要性と土地面積の制約から、住宅の高層化と低層階の娯楽施設という形で都市化を進めたのではないか、と指摘している(p. 8)。また、個人商店(魚屋、八百屋、肉屋、雑貨屋、本・文豪具屋、酒屋、駄菓子屋、電気店など)は、三菱の社員ではないために、家賃や光熱費などを支払う必要があったという(坂本, 2014, p. 158)。三菱直営の購買所(購買会)は16時閉店であったため、夜間の買い物は個人商店で行ったという(加地, 2015, p. 118)。戦後に日用品を販売する労働組合の端島消費生活協同組合の売店は、四、五年で姿を消したという(同上)。

場と墓地、加えて広大な土地を必要とする緑豊かな公園は島外（中ノ島）に建設された（とはいえ、端島住民のための施設である）。狭い土地は、生産設備と居住空間を優先し、緑豊かな公園を建設する余裕がなかったとはいえ、公園のない都市は珍しい。それゆえ、軍艦島は社宅街（後述）に他ならない。これが、黄金の時代の軍艦島を特徴づけるキーワードである。

ところで、黄金の時代は、衰退への序曲でもあった。1960年以降は、主要エネルギーの石炭から石油への移行（エネルギー革命）の影響を受け、斜陽の兆しが見え始めた。とはいえ、合理化の成果から出炭量は落ち込むことはなかった。戦時中に迫る高出炭時代と言えた。

特筆すべきは、衰退の序曲が「黄金期」となったという逆説的現象が生じた点である。この時期は、端島の人口はピーク時よりも減少しており、空き部屋を活用して、二戸を一戸に改造するなど住環境は大きく改善されたからだ。加えて、必要な諸施設がすべて狭い空間内で提供されていた。片寄俊秀は、この時期の軍艦島を「職住近接、シビル・ミニマム充実、住宅問題の解消のすべての実現をもって『理想郷』と称するならば、まさに端島はそのとおりの島であった」と評した[46)]。実際、当時の住民の意識調査では高い満足度が得られている[47)]。この点については、都会より家電製品（テレビ・ラジオ・ステレオ・洗濯機）の普及が早かったことからも窺える（後述）。他方で、高賃金であるがゆえ、鉱員は、精勤しなくとも生活ができた。このことは、稼働率（出勤率）の

46）引用は、NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編（2015）からである（p. 131）。なお、「シビル・ミニマム」とは「地方自治体が住民のために備えなければならない、最低限の生活環境基準」の意味で、国家が提供すべき最低限の生活環境基準（ナショナル・ミニマム）に対応する概念である。わが国では、1965年に発刊された飛鳥田一雄編『自治体改革の理論的展望』（日本評論社）に初めて登場するが、松下圭一（法政大学名誉教授：故人）によって地方自治の政策・制度設計の概念として展開され、一世を風靡したと言われる。片寄は、地方自治体ではなく三菱という私企業が必要最低限の生活環境水準が提供されていた点を「シビル・ミニマム」と呼んだことは、企業城下町が行政区よりも生活環境の提供に大きな役割を果たしたことを示唆していると思われる。

47）NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編（2015）を参照されたい。

低下からも明らかであった。三菱は、稼働率の低さを問題視したが、適切な解決策を見いだせなかった。

ところが、エネルギー革命という時の流れに逆らうことができず、1974年1月15日、端島坑は閉山する。残務処理のために島に残った人々も、4月20日に離島し、端島は、この日から無人島となった[48)]。

3　産業遺産とダークツーリズム
── ダークツーリズムの視点からの考察

三菱は、高島炭坑および端島炭坑を中心とする採炭事業で得た利益をもとに事業を拡大した。高島と端島は、三菱の原点（三菱の発祥の地）と言われる所以である。このことは、三菱石炭鉱業㈱『高島炭礦史』（1989年）の冒頭の「あいさつ」として「高島炭鉱は、当社はもとより三菱全体の飛躍の源泉になったばかりでなく、ひいては近代日本産業の発展に大きく貢献した」と記されている点からも明らかであろう[49)]。

また、高島炭坑ならびに端島炭坑では、最先端の設備を積極的に導入してきた。その高い生産技術は、筑豊地方での炭鉱開発にも大きく貢献したと言われる。なによりも、1860年代後半から1980年代前半までの約120年にわたって、日本の近代化を支えてきた。その長い歴史の幕を閉じたが、2015年に、再び脚光を浴びることになった。高島の北渓井坑跡と端島の地下坑と護岸が、世界遺産「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産のひとつとして登録されたからである。

以下では、高島と端島の産業遺産を対象に、ダークツーリズムの視点から、その観光資源としての意義について考察を加えていく。そこで、高島のその後

48）炭鉱施設の解体作業のために、1974年末まで作業は続けられた。
49）三菱石炭鉱業㈱『高島炭礦史』（1989年）の引用は、柴田（2010）からの孫引きである。

を概観することから議論を始めることにしよう。

⑴　炭鉱閉山後の高島

上述のように、高島町は、飛島・高島・中ノ島・端島の４島から構成されている。いずれも三菱という大企業のもとで、大きく発展してきた。しかし、炭鉱業という唯一の基幹産業を失ったことで、人口が激減し、町は存亡の危機に直面することになる。そこで、各島の現状を簡単に確認しておこう。

まず、端島は、後述するように、閉山後に住民は全員退去し、現在は無人島になった。防波堤兼桟橋で高島と陸続きとなった飛島に居住する人はいない。1997年、高島飛島磯釣り公園が開園し、現在は、マリンリゾート地として活用されている。端島と高島の中間（端島の北北東約700m）に位置する面積0.03km^{2}の小さな中ノ島も現在は無人である。中ノ島では、1879年に採炭が始まり、1890年に三菱が買収、その三年後（1893年）に操業を停止した。出水が多かったからと言われる。三菱は、中ノ島坑閉山後は、島に桜を移植するなど高島と端島の外延として公園の開発、端島住民用の火葬場と墓地が設置されたことは前述の通りだ。公園造成は、1962年から着手され、遊歩道・展望台・遊具のある中ノ島水上公園として完成した。言うなれば、中ノ島は、端島に足りない機能を補完する役割を担ったのである。そのため、端島炭坑が閉山し放棄されると、それに歩調をあわせて、中ノ島も無人島となった[50)]。最後に、高島は、現在も有人である。しかし、過疎化が進んでおり、2017年末時点で総人口は388名となっている[51)]。

50）無人島と化した中ノ島を訪問するには、チャーター便が必要となる。火葬場跡や公園跡を見学するための観光インフラの整備が脆弱である一方で、遺構という観光資源は少なくない。それゆえ、前章で指摘したストーン（Stone, 2006）の「漆黒のツーリズム」に位置づけることができる。

51）蛇足を承知で、高島の移住希望者のための定住情報が以下の Web サイトで閲覧できる。医療、住居の空き状況、買い物場所など生活圏の情報は詳しい（2021年８月13日確認）。
http://takashima.nagasaki.jp/takashimanavi/takashima.html

以下、炭坑閉山後の高島の課題を概観した後、高島におけるダークツーリズムの可能性について考察を加えていくことにしよう。

(a) 閉山後の人口流出と産業誘致策

無人島となり廃墟として知られるようになった軍艦島と異なり、高島は炭坑閉山後も住民が残った。ただし、大きく人口が流出した。そこで、①人口問題（過疎化）、②雇用問題が大きな課題として認識されるようになった。もちろん、これらは車の両輪であり、不即不離の関係にある。

まず、人口問題とくに人口流出には、2つの特徴を見いだすことができる（西原, 1998, pp. 113-114）。すなわち、①人口現象と高齢化現象の同時進、②職業別転出率の著しい偏りである。前者は、労働力人口を中心に、学齢者・幼児などの人口流出が進む、高齢者が島に留まる傾向が強いことを意味する[52)]。後者は、炭鉱閉山後の転出率は、炭鉱組織の上層職員ほど高い比率で転出していたことを指す。それゆえ、誤解を恐れずに言えば、「社会的弱者が取り残された」のである。

高島の炭鉱閉山の苦境は、まさにマイケル・シューマン（Shuman, 2007）の「スマートモール革命」の主張と軌を一にしている。「寄らば大樹の陰」という。しかし、シューマンは「巨大ゆえの脆弱性が露呈するとき、地域社会は路頭に迷うことになる」と批判する。そして、地元と密接なつながりをもつ小規模企業を育成することが結果的には地域経済の自立性に大きく貢献すると主張した。そこで、彼は、LOISというキーワードを提案する。それは「地元オーナーシッ

52）西原（1998）は、炭鉱閉山後の高島における高齢者の人口定着率の高さに注目し、グンナー・ミューダル（Karl Gunnar Myrdal）が、若者が低開発地域から発展地域に移動する「選択的移動（selective migration）」と軌を一にしていると指摘した。蛇足ながら、ミューダルは、低開発地域は物的インラフだけでなく、人的資本への投資（教育や保険など）が不十分であることから、若者の人口流出が集中することを「選択的移動」と指摘した（Myrdal, K. G. *Economic Theory and Under-developed Regions*, G. Duckworth, 1957：小原敬士訳『経済理論と低開発地域』東洋経済新報社，1959年）。

プ・輸入代替主義」を意味する英文の頭文字をとった略語である。

話を高島に戻そう。炭鉱閉山後の第２の課題は、雇用対策ないし地域振興政策である。その柱は３つあった（西原, 1998）。それは、①撤退した三菱が定めた「閉山協定」による支援、②行政からの支援、③企業誘致であった[53]。

第１の三菱からの支援は、高島町にとっては期待外れに終わる。三菱グループからの大手企業の進出がなかったからだ。

第２の行政からの支援については、エネルギー政策の転換にともなう産炭地域の活性化支援事業の利用を指す。結果的に、高島は、1991年に農林水産事業として、「高島地区マリノベーション拠点漁港漁村総合整備計画」が認定された。同事業のキャッチフレーズは「石炭を魚に変えて島おこし」であった。上述の磯釣り公園の他に人工海水浴場など「水産業と海洋性レクリエーション」を中核とする地域振興事業であった[54]。同事業は、全日本建設技術者協会の21世紀「人と建設技術」賞を受け、地元住民や外部者からも好評を得た[55]。

第３は、産炭地域振興法を柱とする企業誘致策である。結果的に、６企業が誘致された。内訳は、三菱出資の企業が１つ（菱高開発：セメント二次製品の製造・販売）、三菱を含む第三セクター方式の新事業が３つ（高島興産：ヒラメ養殖・販売、シーテックス：未開発高級魚の養殖システム開発、高島グリーンファーム：トマトの製造・販売）、民間企業誘致が２つ（高島久松：寝具一式の製造・縫製、シンコー水産：水産加工製造）であった。

53）以下の記述は、宮入（1989）、西原（1998）、平井（2016）をもとにしている。

54）長崎県企画振興部「長崎県離島振興計画」2013年５月の171頁から180頁の「高島地域振興計画」を参照した。インターネット上に公開されているが、編集可能なPDFファイルとして公開されていることから、敢えてURLは記載しないことにする。

55）2000年度の「21世紀の『人と建設技術』賞」のWebサイトから公表結果のPDFファイルが閲覧可能である（2021年８月15日確認）。
https://www.zenken.com/hypusyou/21seiki/h12/H12_21_midasi.html#itiran

(b) 進まない産業誘致と地元企業の健闘

しかし、誘致された民間企業は、いずれも数年で撤退することになった[56]。景気が低迷した時期と重なったためか、97年時点では、３社が事業を継続するに留まった（シーテックスの事業を継承した高島興産は、社名を高島シーテックスに変更した）。ところで三菱関連の新事業の内容は、炭鉱労働者の魅力的な転職先とは言い難かった。実際に、雇用者数も総計で30名前後と少なく、雇用対策としては期待外れに終わったと言える。結果的に、高島の産業は、三菱依存から行政依存に移行しただけだという指摘もある（宮入，1989）。高島には、地方が抱える諸問題が凝縮していることが分かる。

三菱が関係した企業１社、第三セクター３社の現在については、残念ながらCOVID-19の感染拡大防止策の上で追加の現地調査が実施できない状況なので、公開情報をもとに簡単に紹介しておく。とはいえ、菱高開発の現状は確認できなかった。高島シーテックスの事業は、複雑な経路を辿りながらも継承されていた。2001年、高島町と西彼南部漁業協同組合の共同出資で設立された高島町種苗生産センターが、高島シーテックスの事業を継承したと推測される[57]。その後、同センターは、市町村合併によって、株式会社長崎高島水産センターとなり、長崎市水産センターから業務委託を受ける形で養殖などの事業活動を展開してきた。しかし、2020年末、業務委託をしていた長崎市水産センター高島事業所が廃止され、牧島事業所に統合されることになった。それにともない、同センターの事業を委託されていた株式会社長崎高島水産センターの継続は困難と考えられ、2020年度末を以て解散する方向で調整するとの報告書が出され

56）高島久松は1988年11月に操業を開始したが、92年１月に撤退した。シンコー水産は、1989年に操業を開始し、1994年８月に撤退した。

57）長崎新聞（2021.3.31）の記事に「同事業所は2001年、種苗生産や炭鉱閉山後の島の活性化などを目的に旧高島町が開設し、当初から同センターが運営。05年の自治体合併後は市が施設を引き継ぎ、同センターが運営を受託してきた」とあることから推測しているに過ぎない。起こりうる過誤は筆者に帰せられるべきものである（長崎新聞「魚の大量死…「ずさんな管理体制」課題残す　長崎市水産センター高島廃止」https://nordot.app/749825336039555072）。

た[58]。その後の資料は公開されていないが、おそらく解散されたと思われる。

第三セクターのひとつ、高島グリーンファームは、0.02km^{2}の規模で事業を開始した。しかし、採算がとれず、作付面積を半減せざるを得なかった。それにもかかわらず、結局、高島が長崎市に併合される機に事業を撤退した。同事業を継承したのは、地元の海運業者である崎永海運である。現在、崎永海運は、同事業を「たかしま農園」として運営している[59]。ただし、事業を継承したものの、ハウスの老朽化などで燃料費が経営を圧迫したことから、直ぐに撤退という選択肢を考えたという。それでも、高島に新しい事業をという思いから、トマトのブランド化を目指し、思い切った改革を行ってきた。たとえば、3ヶ月の長期間の職員講習会を開催するなど職員の意識改革を精力的に取り組んできた。このような努力が実り、崎永海運は、糖度の高い「高島フルーティートマト」の開発に成功した。懸念された燃料費は、自動灌水システムとハウス加温機・ヒートポンプを導入することで削減できた。しかも、これらはトマト栽培の鍵を握る「水分管理」と「温度管理」の最適化に貢献した。選果場の作業効率化にも成功し、結果的に農地拡大につながったという。さらに、「たかしまフルーティトマト」のファンクラブをつくり、2019年末現在で200名以上の会員がいる。長崎県内のスーパーなどで販売も行っているが、島内だけで800万円程度の売上があるという。この事例は、シューマンの指摘する「スマートモール革命」の好例だと言える。

58）長崎市議会（2020.11.30）「長崎市：令和２年環境経済委員会」議事録、および配付資料（令和２年11月市議会環境経済委員会資料 所管事項調査 長崎市水産センター集約に関する取組状況について）および、長崎新聞（2020.3.23長崎市 高島水産センター廃止へ　2021年度以降　牧島に機能集約」https://nordot.app/614650350463779937?c=174761113988793844

59）以下の記述は、長崎県中小企業団体中央会編『ながさきものづくり：ものづくり補助金成功事例種［長崎県］』2019（崎永海運株式会社の事例はpp. 36–37）、およびJAところ（北見市常呂町）発行の広報誌「光と風の大地」No. 542（2019年２月）に記載された研究報告「たかしま農園」を参考にした。

(c) ダークツーリズムからみた高島

以上、高島炭鉱閉山後の雇用対策について簡単に振り返ってきた。次に、高島の産業遺構をダークツーリズムという視点から考察を加えてみたい。

前章で議論したように、ダークツーリズムとは「戦争や災害を始めとする人類の悲劇の記憶をめぐるる旅」を指す（井出, 2013, p. 114）。産業遺産そのものは「悲劇の記憶」ではないので、産業遺産を旅すること自体をダークツーリズムと呼ぶことはできない（井出ほか, 2016, p. 353）。しかし、前章で述べたように、概念としてのダークツーリズムは、「死と悲劇」を「意図せざる負の側面」と捉え直し、「光があるから影ができ、光が強いから影が濃くなる」と考えることで、地域をより深く理解できると考えられる。さらに、そのような深い理解が、新しい地域の価値創造の牽引力となると期待できる[60)]。

軍艦島では、後述するように軍艦島を残したいという活動や思いが存在した。無人島となり廃墟となったことから、保存という方向性が提示された。他方、高島では、閉山後も島で暮らす人たちがおられた。軍艦島が廃墟となる数十年の間も、高島では雇用が必要であった。このように地域に関わるアクターの相違が、炭坑跡という同じ産業遺産を内包しながらも、一方では「保存」や「世

60）ダークツーリズムによる地域活性化の議論について、「地域に新しい価値を見出すための契機となる（井出, 2015）」の言う「地域」とはなにかが曖昧であり、「その現場となる『地域』において、その実践を行なうことには大きな困難が伴うだろう」と木村（2017, p. 45）と指摘する。われわれは、地域の実践を捉えるための枠組として、ZTCA モデルを提唱してきた（原田・古賀, 2015；古賀, 2021）。そこでは、地域を「ゾーン」「コンステレーション」「トポス」の 3 つの視点から捉えている。ゾーンとは、区切りである。コンステレーションとは、アクター・ネットワーク論が指摘するアクター（行為項）の織りなす網を通じて行為遂行的に生みだされる価値を指す。コンステレーションによって浮かび上がってきた地域をトポスという。たとえば、農水産物を付録とする月刊誌「東北食べる通信」の読者にとっては、付録の食材を調理する我が家が「東北」とつながっていると考えるとき、業績区画としての東北ではなく、コンステレーションに裏打ちされたトポスとしての東北を考えている。そうであれば、木村（2017）の指摘する地域とは、次元の異なる形で地域活性化という可能性を見いだすことができるだろう。このような地域の視点から、ダークツーリズムの可能性については、別の機会（2021年10月16日開催予定の地域デザイン学会 第 2 回 ZTCA デザインモデル研究フォーラムでの筆者による特別講演「コンステレーションデザインの課題：世界遺産を例に」）にて論じる予定である。

界遺産」という方向に舵が切られ、他方では「雇用問題」に焦点がおかれるという「翻訳（前章参照）」の違いが生まれたと言える。この限りでは、高島と端島で、異なるアクター・ネットワークが形成された結果、炭坑跡というアクターの役割が一方で「世界遺産」という「翻訳」に貢献したのに対して、他方では大きな役割を担うことなく、結果的に地域の課題を「雇用問題」という翻訳に落ち着いたといえる。このように、概念としてのダークツーリズムを社会物質性の視点から捉えることで、観光資源の意味がどのように位置づけられてきたのかという経緯を上手く説明することができる。

ところで、高島の雇用策は、お世辞にも成功したとは言えなかった。閉山後に生まれた事業のうち、筆者が確認できたのは、トマト栽培・販売事業だけであった。しかも、当初の第三セクターは頓挫し、地元の海運業者の努力によって、ようやく軌道に乗ったという状況である。ダークツーリズムという切り口で高島を眺めるとき、炭鉱業という１つの産業に依存した地方の町が閉山によって被った悲劇を想像しながら、改めて「産業社会とは何か」を問い直すことができると期待したい。そうすれば、前述の「高島フルーティートマト」においても、もう一つのブランド化、つまり物語の付与ができるのではなかろうか。

もちろん、高島には、世界遺産の構成資産のひとつ「北渓井坑跡」がある。その他に、南洋井坑跡や二子竪坑跡など高島炭坑の産業遺産が点在している。さらに、グラバー邸跡、百間崎と呼ばれる防波堤跡、扁平な形が特徴の「コンニャク煉瓦」で作られた擁壁跡、オランダ式三角溝など観光資源は少なくない。三菱高島炭砿労働組合の事務所跡を利用した高島石炭資料館もある。軍艦島と異なり、高島は自由に移動できることから、これらを観光資源としつつ、現在展開中のマリンリゾートと連携することで、複合的な旅を提供することができる。また、「石炭を魚に」かえる背景を深く理解することで、「島で生きること」について立ち止まって考え、地域の在り方を見つめ直す機会を提供できるのではなかろうか。

さらに、軍艦島との連携も課題である。そもそも高浜町に属した端島が高島

町に併合された背景には、三菱の意向が大きく反映されたと言われる。三菱が地下隧道で結ぶという計画は頓挫したものの、昭和初期まで別の村に属した両島は、行政区として統合されることになり、三菱としては、行政関係の手続きなどが簡素化したと予測される。また、炭坑としての主力は、高島ではなく端島であった。端島は全土が三菱の所有であったので、完全撤退つまり放棄による無人化が可能であった。他方、高島では、過疎化が進んだとはいえ、住民が残った。これらのコントラストそのものがダークツーリズムの対象となる。後述するように、強制労働を唯一の「負の遺産」と位置づけてしまうと、ダークツーリズムが目指す近代化の光と影という問題を矮小化してしまう（井出ほか, 2016）。

⑵　炭鉱閉山後の軍艦島

次に、軍艦島をダークツーリズムの視点から議論していこう。まず閉山後の経緯を概観した後、①世界遺産と軍艦島、②韓国からのクレームと朝鮮人労働者や中国人捕虜の強制労働問題、③軍艦島の豊かな生活の意味という３つの視点から考察していく。

⒜　軍艦島保存運動のコンテクスト転換

閉山後、無人島となった軍艦島は、塩害と風雨にさらされたことで、コンクリート構造物の劣化が進んだ。廃墟となった軍艦島は、閉山から30年を経て、「産業遺産」として注目されるようになる。その背景にはいわゆる「廃墟ブーム」の影響がある。無断上陸者の増加に腐心した三菱は、2001年、高島町（当時）に島を無償譲渡した。また、2003年には、かつての生活空間に見知らぬ廃墟マニアが押し寄せることを危惧した元島民の坂本道徳氏を中心に「軍艦島を世界遺産にする会」が発足し、草の根的に島の保存活動が展開されるようにな

った[61]。

転機となったのは、2009年、ユネスコ世界遺産暫定リストに「九州・山口の近代化遺産群」の構成資産の一つとして記載されたことである[62]。この時期に、長崎市（旧・高島町と合併し、島の所有者となっていた）は、島内に見学通路を整備し、安全規定を定めた上で一般公開を開始した（2009年４月22日から）。2014年には、リストの名称を「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」に変更さて、「九州・山口」という地域枠をはずし、岩手や静岡を含む広域の遺産群として、世界遺産登録を目指すことになる。そして、2015年に晴れて、世界遺産に登録された。

したがって、軍艦島単独の登録ではなかった。東北にまで広がる23もの遺産群の１つの構成要素としての登録であった。しかも、軍艦島そのものではなく、明治期に期間が限定された。廃墟の象徴であった住宅等は大正時代の建造物であるために、世界遺産の対象外である（世界遺産を保護する緩衝領域と位置づけられる）。世界遺産の対象は、明治時代に構築された「護岸と地下坑道」だけである。しかし、地下坑道は非公開である。そもそも世界遺産は「人類が継承すべき遺産の保存」を目的としている。そのために、現状保存のために「地下に埋もれたまま」維持されることになった。結果的に、見学できる世界遺産は、コンクリートが崩落した岸壁から姿をだす「天川技法」の赤土の部分だけになった。この点について、「軍艦島を世界遺産にする会」を牽引してきた坂本道徳理事長は「正直なことを言えば、産業革命遺産としての世界遺産は、私の意図する形ではなかった」と吐露している（坂本, 2014, p. 223）。

61）坂本理事長の活動の経緯については、後藤・坂本（2005）や坂本（2015）に詳しい。

62）坂本理事長は、自らが生活を営んだ軍艦島の保存を訴えるために「世界遺産登録」を目指してきたかが、2006年10月30日に東京ビックサイトで開催された「経済産業省・世界遺産シンポジウム」の場で、九州の近代化遺産群」の取り組みに対して、来賓の安倍昭恵首相（当時）夫人から「鹿児島（薩摩）があるのであれば山口（長州）がこの近代化に関わっていたのは歴史上の事実であり、産業遺産は山口にも多くあるとの指摘」があり「この日から『九州・山口の近代化遺産群』となり、「少しつづ広がっていく『産業遺構群』に、私は戸惑いを持ち始めていた」という（坂本, 2014, pp. 205-206）。

(b) 世界遺産と軍艦島

さて、上述のように2009年４月から軍艦島への一般上陸の解禁がされるとの発表を受け、多くの船会社が上陸ツアーを企画し、認可を求めた。結果的に、解禁日当日にツアーを開始できたのは一社のみであった。とはいえ、ツアー参加希望者は殺到し、新しい観光資源として軍艦島は期待されるようになる。当時、「軍艦島を世界遺産にする会」の坂本理事長は、軍艦島ツアーガイドを担うべく準備をしていた。彼は、見学者が「物見遊山になってしまう」ことを危惧し、「きちんとしたガイドの育成と保存に対する技術的な議論」が進むことを望んだ（坂本，2014，p. 212）。

ちょうど、その時期に十年ぶりに端島出身者の同窓会が開催された。その席上、同級生から声をかけられた。ある女性からは「あんたのおかげで私が軍艦島に住んでいたことがばれてしまった。どうしてくるのか」と、また別の同級生からは「この島でうまれてもいないのに、こんな活動をするのか」と（前掲書，pp. 214-215）。そこで、坂本理事長は、「ものめずらしさにこの島を訪れることは、多くの島民たちのかつての生活を単に覗き見しているだけに過ぎない。さまざまな思いをもってこの島を眺めている元島民がいることを忘れてはいけないのだ」と感じたという（前掲書，p. 215）。

一方で、「遊歩道がある場所は私が住んでいた住居の場所ではない（中略）そこには当時の面影を残すものはほとんど存在しない」とも述べている（前掲書，p. 213）。ここに、ダークツーリズムを提供する側の苦悩を窺うことができる。繰り返しをいとわず強調すれば、概念装置としてのダークツーリズムの意義は、①立ち止まって考えることの重要性の認識、②現実を直視する「まなざし」の体得、③観る／観られるという二重性の内面化である。これらは観光者に求められる観光リテラシーであると同時に、提供者が考慮すべき価値提案の評価軸を示すものである。

もちろん、坂本理事長は、ガイドの際に「ここでちょっとだけ、足音、お喋りと、カメラのシャッターの音を止めてみませんか」と声をかけ、静寂の時間

を過ごした後「これが、今のこの島の音です」と説明するという（前掲書，pp. 46–47）。このような行為は、軍艦島が「廃墟」でなく、今は「人がいなくなった島」であるが、かつては「人々の声や炭鉱作業で賑わった端島」であることを見学者に感じさせる優れたガイドと言えるだろう[63]。

さらに、軍艦島を見学に来た観光者自身が、実は元島民のガイドから「観られている」ということを意識し、そこから「何をどのように観光すべきか」の内省する方向に進むことが概念としてのダークツーリズムの役割と言える。

また、「光があるから陰がある」という視点からは、世界遺産そのものの暗部を考えることも１つのダークツーリズム的行為である。前述のように、時代を明治に限定したことで、軍艦島そのものではなく、岸壁と地下坑道という「見えない部分」が世界遺産の構成資産となった（この点は、佐賀県の三重津海軍所跡が興味深い）。さらに、同じく世界遺産の構成資産である長崎の小菅修船場跡は、三菱造船所の敷地内であるために見学そのものが制限されている。このような事例から、「世界遺産とは何か」を批判的に考察する態度を引き出すことが、われわれの提唱する「概念としてのダークツーリズム」の意義である。

ところで、世界遺産登録に向けた活動の中で、軍艦島単独ではなく、「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産の１つになり、やがては「明治日本」と対象が拡大していく中で、「軍艦島は国の文化財にもなっていない。また、大陸からの誹謗中傷がある島」であるとして「お荷物」になるといった紆余曲折の物語がある（坂本，2014，p. 210）。このような経緯をアクター・ネットワーク論で議論することで、光を通して陰を見いだすことができる。前章で述べたように、ダークツーリズムは、社会の闇を暴くことを目的にするものではない。そうではなく、現実のありのままの姿を素直に見つめるまなざしを身につけるこ

63）他方、上述のように、水着姿でプールに向かう少女の写真を掲げ、市民生活の豊かさをガイドする一方で、プールの場所が、かつて中国人収容所であったことが語られない。実際には、ガイドの統一ガイドラインがないために、現場での苦悩をガイド自身が背負い込む形になっている。

とがダークツーリズムの目的である。このとき、「世界遺産とは何か」を考えることは、まさにダークツーリズムの醍醐味と言えるだろう。

(c) 世界遺産の光と影

次に、世界遺産の光と影について考察を加えていく。議論を始める前に、ある新聞記事を紹介したい。それは、2021年７月22日付けの産経新聞からの抜粋である。

> 国連教育科学文化機関（ユネスコ）世界遺産委員会は22日、長崎市の端島（はしま）炭坑（通称・軍艦島）を含む世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」について、徴用された朝鮮人労働者をめぐる説明が十分ではないとして、「強い遺憾」を盛り込んだ決議を採択した。韓国の要請に沿ったもので、日本に対し、犠牲者を記憶するための方策をとるよう勧告した。

ユネスコは、2022年12月までに勧告の実施状況を報告するように日本に求めた。勧告では、東京に開設された展示施設（産業遺産情報センター）の展示内容が不十分だと指摘している。加藤官房長官は、記者会見で「適切に対応していきたい」と語ったが、今後の対応の方向性には明示しなかった[64)]。

果たして、強制労働はあったのか、なかったのか。もちろん、2016年６月１日に三菱マテリアル（旧・三菱鉱業）が中国人元労働者と和解したとの報道があったことからも、徴用そのものを否定することが難しいだろう[65)]。また、既に多くの論考が報告されていることから、人権問題の存在そのものを否定することはできないだろう[66)]。

64）日本経済新聞）（2021年７月22日付）「軍艦島巡り「強い遺憾」採択　世界遺産委 朝鮮半島出身労働者の説明「不十分」」、産経新聞（2021年７月22日付）「軍艦島に「強い遺憾」 ユネスコ世界遺産委が決議採択」。

65）三菱マテリアル株式会社「中国人元労働者との和解について」（2021年８月15日確認）https://www.mmc.co.jp/corporate/ja/news/press/2016/16-0601.pdf

66）長崎在日朝鮮人の人権を守る会による精力的な調査活動の成果、たとえば、長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『軍艦島に耳を澄ませば』社会評論社（2011年）や同会編『長崎県朝鮮人強制連行・強制労働実態調査報告書』（1986年）、竹内康人『調査・朝鮮人強制労働

しかし、ダークツーリズムは「何が真実かを決定する行為」ではない。また「隠されてきた闇を暴露すること」でもない。というのは、このような態度は、「他人の不幸は蜜の味」や「楽屋の裏を覗く」といった趣向がダークツーリズムだとする誤解の裏返しといえるからだ[67]。ダークツーリズムが求める態度は、そうではなく、正と負の異種混淆体として、ありのままの状況を受け止め、考えることにある。そうであれば、「なぜ強制労働が生じたのか」を考え、反省し、未来に同様のことが生じないように決意する必要がある。このとき、観光者ひとり１人の力は小さく、反省といっても、賠償金を支払うことなどはできない。多くの場合は、「何ができるのか」を考えるだけかもしれない。しかし、そのような「立ち止まって考えること」が重要なのである。

徴用工問題では、ともすれば、「嫌韓」や「反韓」と「人権派」との政治思想の議論に終始してまう傾向が強い[68]。もちろん、健全で建設的な対話を否定するものではない。ときには、口角泡を飛ばす議論も必要であろう。しかし、現実問題としては、感情的な攻撃が繰り返され、次第にエスカレートしていくことが多い。それでは、過去の継承も未来への決意もままならない。むしろ、朝鮮人労働者や中国人捕虜の問題は、「都市化とは何か」といった近代産業の議論を通じて検討することで、産業遺産の複数の影を意識することができると考えら

〈1〉炭鉱編』社会評論社（2013年）、髙實（2016）などを参照されたい。

67）韓国映画「軍艦島」では、朝鮮半島出身者が軍艦島で強制的に労働されられる中での虐待などを描いている。作中では、これらは「事実」であり、真実を糾弾するという趣旨の字幕が掲げられる。しかし、同作品には、中国人捕虜の姿は出てこないなど疑義を呈する論者も少なくないが、ここでの焦点は、真実を暴く・告発するという態度の背景には、自分たちだけが真実を知っているという優越感が見え隠れし、その「影（shadow）」の働きは「秘密を覗き見する淫靡な喜び」に通じるのではないかという私見にある。もちろん、学術的に議論できる水準ではないのだが、やむにやまれぬ思いからの意を決した告発と「こんなことも知ってるよ」という告発は次元が異なるだろうし、後者の立場から「暗部を暴く」という態度を「ダークツーリズム的だ」と言われるのは不本意であるからだ。

68）井出ほか（2016）は、強制連行や虐待などの人権問題だけが、産業遺産における「唯一の影」という誤解を招きかねないと指摘し、その結果、「近代産業の光と影」という視座が曖昧になってしまう点を危惧している（p. 354）。

れる。そこで、この点について項を改めて議論することにしたい。

⑶　社宅街の豊かな生活：近代化を考える

最後に、軍艦島の豊かな生活という「光」から垣間見れる「影」について指摘しておきたい。繰り返し強調すれば、軍艦島は「豊かな生活」が営まれてきた、「島には何でもあり」と称されるほどの繁栄を誇った。前述のように、「黄金の時代」の後半は、高賃金の影響もあって、テレビなどの家電に普及率は都心部よりも高かったと言われる。また、閉山時に、それらの電化製品が放置されたことからも、「新天地で買い直せば良い」という気持ちを窺うことができる（後述）。

この豊かな生活の背景には、この街が「三菱の鉱場敷地内に作られた生活圏」であることが大きい。改めて言うまでもなく、軍艦島は全島が「三菱の土地」である。そのために、島に生きると言うことは、「三菱の敷地内で生きる」ということである。そのために、島（構内）には「一般の住環境では考えられないほどの厳しい管理体制」が存在していた（方寄，2015，p. 152）。それにもかかわらず、鉱員とその家族に「息苦しさ」を問うと、決まって「とんでもない。なにもかもあけっぴろげで、住民同士みんな思いやりがあり、おまけに住居費はタダ、光熱費も安く賃金も悪くないし、５年頑張れば炭坑年金がつく。こんな住みよい天国のようなところは他にはないと思う」と「本気」で返されたと住民意識調査に携わった方寄俊秀は後に述懐している（NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編，2015，p. 154）。

⒜　住環境としての会社

たしかに、軍艦島では、住居費や光熱費はタダ同然だった[69]。三菱の社員だけ

69）閉山時において、住宅費・電気・水道・ガスが一定金額内であれば「10円」を徴収していた（阿久井，1995，p. 87）。また、島内に３箇所あった共同風呂は無料であった（阿久井，1995，p. 85）。

でなく、鉱員や島内の小中学校に赴任していた教職員も同じであった[70]。このような好待遇の背景には、当然のことながら労働組合の努力を指摘しなければならないが、それだけでなく、三菱が納屋制度廃止後に労働力を確保する上で苦労してきたことも重要である。

また、「黄金の時代」の後半は、傾斜生産方式が終わり、エネルギー政策の転換の渦中で石炭産業が次第に斜陽化する過程では、図らずも軍艦島の住環境は大きく改善された。とくに、1964年に起きた坑内ガス爆発事件を契機に、5000人から3000人に人口が減少した。その結果からか、日給住宅の壁をぶち抜いて２戸を１戸に拡張する工事が頻繁に行われた（阿久井, 1995, p. 47）。このような拡張工事は、「社宅」であるからこそ可能であった。

社宅という言葉は、1891年に三菱の台風被災報告書の中に登場する。三菱が端島炭鉱を買収した前年に作成された書類には、納屋と呼ばれる建物が「住所」と記載されてる。文字通り、鉱員が「住む所」の意味だ。ところが、翌年の報告書には「三菱社員住居社宅」と記載されている。これらの資料を丹念に読み解いた池上（2010）は「おそらく『社宅』という表現を用いた最初の資料ではないか」と指摘した上で「社宅は、会社所有の住宅」という意味であることを明らかにした。

会社所有の住宅は、職位や社内の序列と明確に連携していた。日給制度の鉱員を対象とする「日給住宅」という表現が用いられていることも明らかである。日給住宅では、陽の差す上層階が「上級」であった。つまり、「社会階層と居住場所とが明確にリンクしていた」のである（NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編, 2015, p. 153）。鉱員は、年齢や勤務年数、家族数などで評価された点数に応じて転居を申請できた[71]。また、軍艦島の地図を見れば分かることだ

70）終戦後の復興期に勤めた教師は「端島を出た後の野母崎では生活費と飲食費がかかるようになり、給料は変わらなかったから一気に生活が苦しくなった」と述べている（坂本, 2014, p. 164）。

71）後に緩和されたという指摘もあるが、実際には、ある程度は詰め所の管理者の裁量がは

が、日給住宅の多くは外洋に面した西側に建設されている。逆に、内海に接する比較的穏やかな東側には、採炭施設が軒を連ねている[72]。つまり、あくまでも採炭施設構内に住居が置かれたという点に留意する必要がある。そして、軍艦島は究極の「職住近接」であり、コンパクト・シティのさきがけであったと言われるが、居住圏が防潮堤を兼ね、そこに所属階層の差異が反映されていたという点では、「主が職、従が住」であったことは疑いようがない[73]。

(b) 都市機能を備えた社宅街

ところで、世界遺産に登録された産業遺産の中には、社宅街（company town, industrial village）という分類がある。イタリアのクレスプダッタは「綿紡績工場と労働者のための理想郷」、チリのシーウェル鉱山町は「20世紀に建設された大規模な山岳鉱山都市」として貴重な産業遺産と評価された[74]。軍艦島も僅か0.063km^{2}の狭い島内に、社宅だけでなく、小中学校、病院、プール[75]、映画館や社交場などが提供されている。まさに「社宅街」である。

池上（2010）は「海外では社宅街が世界遺産に登録されているにも関わらず、日本の産業遺産には、それらが欠落しており、生活史が反映されていない」と指摘する（p. 35）。ただし、軍艦島の街は、あくまでも「社宅街」であり「都市」ではない。ここで、都市とは何かという議論を重ねる紙幅も筆者の能力も

たらいたと考えられる。ただし、その裁量の根拠は「三菱に対する貢献度」であったことは言うまでもない。

72）桟橋が設置されていることからも東岸の波が西岸に比べて穏やかだったことが窺える。軍艦島ツアーでは、島を周遊する際に、波の大きさで外洋であることが体感できる。

73）池上（2010）は「主は「職」であり、「住」はあくまで従である」と指摘した（p. 36）。また、片寄は「居住者が気兼ねなしに動き回れる空間は、それぞれの所得階層によってきわめて狭く限定されていたのである。子どもたちもそこは心得ていたようだ」と述懐している（NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編, 2015, p. 153）。

74）その他にも、イタリアのイヴレーア（オリベッティ社の創業地、20世紀を代表する工業都市モデルとして評価されました。英国のニューラナーク（綿紡績工場とその労働者住宅）、ソルティア（工場とその労働者のための施設や住居のモデル・ヴィレッジ）などがある。

75）外洋のために波が激しく、護岸からの遊泳は禁止されていた。

持ち合わせていないが、基本的には、都市では「匿名性」や「多様性」が重要となる。しかし、軍艦島は最盛期で5000人が住んでいたとはいえ、狭い島なので「噂があっという間に広がる」状況であり、「プライバシーを気にすることなく、あるがままに生活していた」という[76)]。つまり、端島は「都市機能を備えた社宅街」であったと言える。

社宅街の特徴は、独自のワーク・ライフ・バランスを形成する点にある。改めて言うまでもなく、炭坑作業は、過酷である上、三交代勤務である。そのために、鉱員の生活リズムにあわせて、端島の時間は流れていく。昼間は夜勤者が寝ているために、日中の子どもの遊び場が限られてしまう。鉱員以外の風呂の時間が限られている。この限りでは、仕事を中核とする職場空間が拡大して、日常生活が飲み込んだ状態が、端島の生活と言うことができる。

しかも、外洋の孤島という地理的条件も生活環境を厳しいものにした。1957年に海底水道が完成してからは真水不足に悩まされることはなくなったが、時化や台風の脅威にさらされていた[77)]。

このような閉塞された環境の中で、人々は、競って家電製品を購入した。洗濯機や冷蔵庫、テレビやステレオなどの普及率が都心部よりも高くなった背景には、顕示的消費の影響が大きいと考えられる[78)]。社会階級と連結した生活空間であることから、一種の「災害ユートピア」が生まれ、それが「心地よい近所

76）坂本（2014, p. 78）。また、片寄は、1973年に実施した住民アンケート（n=20）では「うわさがひどい」という声（下請け層）があった（引用は、NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編（2015）所収の方寄（1974））。

77）台風の被害は、桟橋が流されるなどの被害だけでなく、日常的な塩害が酷かったと言われる。また、防潮堤を兼ねた日給住宅では、9 階でも波しぶきを受けたという（坂本, 2014, p. 134）。真水については、海底水道が利用されるようになった1966年のデータでは、工業用水をのぞした端島の吸水量は、長崎のそれを上回っていたという（阿久井, 1995, p. 85）。

78）顕示的消費とは「周囲からの羨望のまなざしを意識して行う消費行動」のことである。端島の消費行動については、後藤・坂本（2005）が「私の聞いた話では、端島の人は『買い物』に贅沢だったという。女性の化粧品や衣料も高級品ばかりを買っていたそうであるし、家電ブームのときには端島の普及率は全国的にも高かった。また、給料日を狙って、わざわざ長崎市の業者が商品を持ってきて売っていたそうだ」と述べている（p. 85）。

づきあい」となった[79]。また、このような同質的な生活環境が、逆に顕示的消費を促したのではなかろうか[80]。

(c) 労働力の再生産が優先される街

島に生まれ、島で育ち、島で働く。親子三世代が社宅で生活したケースもみられる[81]。その背後には、加地（2015）が指摘するように「鉱員は、退職するとすぐに島を離れなくてはならず、引き続き島に住みつづけるには他の誰かが鉱業所に就職しなければならなかったから」である（p. 64、ただし、漢字表記は改めた）。光熱費や住居費がほぼ無料で、徒歩圏内で生活必需品が購入でき、職場も近いという環境は、おそらく他では実現できないだろう。このような快適な住環境を放棄して、本土に戻ることは経済的にも負担が大きい。そこで、退職者が出た家族の子弟が鉱員として就職することで、住環境を維持するという選択がなされたと考えられる。実際、加地英夫氏の場合も、職種が異なるものの父から子に鉱員という立場が引き継がれることで住環境が維持された。島で結婚し、そのまま鉱員として働いた若者も少なくない。そのために、密集した高層住宅のベランダ越しに親戚や兄弟が会話するということも日常茶飯の出来事だったようだ。この限りでは、軍艦島では、生活空間を職場がとりこむことで、「労働者の再生産」を可能にしたと考えられる。言葉を換えれば、三菱は、快適な住環境を提供することで、炭坑に労働者を縛り付けることに成功したと言える。つまり、快適な住環境は「鉄の檻」であった。

また、軍艦島では、個人の労働力の再生産（recreation）するために、様々な工夫が凝らされていた。軍艦島で生活していた元島民の手記などでも「年中行

79）レベッカ・ソルニット（Rebecca Solnit）が提唱した概念で「大規模災害の後に一時的な現象として発生する理想郷的コミュニティ」を指す。

80）柴田（2010）は「このような、プライバシーも無い、濃密な家族ぐるみの生活は、一つの企業・同一職業の集団の中での、生活圏の小ささ・密度の濃さ（住居が密接、人々の生活は島の中で完結）であったゆえに可能であったと言ってよい」と指摘している（p. 68）。

81）たとえば、坂本（2014, p. 145）。

事」や「スポーツ」が多く語られていることからも、レクレーションが充実していたといえる。前述のように、映画館やプールなどの娯楽施設が整備されただけでなく、各種イベントも精力的に開催された[82)]。具体的には、「三菱がリクリエーションとして、年賀式、山神祭、お盆の行事（合同慰霊祭、盆踊り、花火大会、運動会など）といった行事を開催、労働組合も島民共同の娯楽として、歩け歩け大会、ミカン狩り、演芸大会など」が提供されていた（柴田, 2020）。

また、前述のように「屋上庭園」では、ナスやトマトなどの野菜を栽培し、収穫祭を行うなど充実した市民生活を過ごすことができた（柴田, 2010）。ところが、繰り返しをいとわず強調すれば、広い場所が必要な公園、労働力の再生産とは次元の異なる火葬場と墓地は軍艦島にはなかった[83)]。このことは、限られた土地の中での優先順位が明確に示されている。

これらの点を鑑みれば、都市機能を充実させた言っても、労働力とその再生に関する施設のみで、亡くなれば島外に出されるという印象を拭いきれない。パチンコなどの遊興施設をリクリエーション施設と捉えるならば、その印象はさらに強くなる。というのは、本来のリクリエーションの意味は「再び（re）労働力を創造する（creation）」ことにあるからだ。たとえば「東洋の魔女」と呼ばれた日本紡績（後のユニチカ）貝塚工場が、バレーボールなどのリクリエーションを導入した背景には、心身をリフレッシュして労働力を再生させるためであったと言われる（新, 2013）。つまり、「仕事の疲れを癒やし、労働意欲と体力を回復すること」であるリクリエーションの究極の目的は「労働現場に元

82）端島では、テレビが早く普及したために、1970年頃の映画館は「子どもにみせられないものに」なったという（後藤編, 2015, p. 89）。また、1970年代後半には、映画を上映せずに、宴会場などの役割を担ったとも言われる。坂本（2014）は、上映を中止したかどうかには言及せずに、「映画館は祭りの後の宴会場に利用されるなど集会場の役割を果たしていた」と述懐している（p. 214）。

83）1970年代には、コの字型の65号棟（報国寮）の中庭部分の木造住宅が撤去された後には、遊具が設置された児童公園が作られていた。その他に、日給住宅と防波堤の隙間に児童公園が設置されたが「ただの空き地にしか見えない」と指摘されている（後藤編, 2015, pp. 91–92）。

気で戻ってくること」にあった。

他方、島外（といっても三菱の土地であった中ノ島：旧中ノ島炭坑）に建設された公園は、楽しみそのものが目的である「レジャー」である。レジャーを島外に、レクレーションは島内にという設計思想の背後に、やはり仕事重視の論理が見え隠れしている。また、墓地と火葬場が島外ということは、たとえ「島生まれ島育ち」であっても、ふるさとに骨を埋めることはできないことを意味する。もちろん、われわれも居住地の近くに埋葬されるわけではない。とはいえ、生活に必要なものが総て揃うコンパクトシティと言える端島には、生きて働く人とその家族しか居住が認められていないという点に、やはり「社宅街における土地活用の基準」の厳しさを感じざるを得ない。

(d) 火葬場から垣間見る近代化の論理

ところで、火葬に際して、軍艦島内の高浜村端島支所の跡地から、1939年から1945年の間の「火葬認許証下附申請書」が発見された。岡正治氏らによって、そこに記載されていた日本人1162人、朝鮮人122人、中国人15人の氏名年齢・本籍地・死因などが分析された。事故だけでなく「虐待などでなくなったのではないか」と推察されている[84)]。また、この資料をもとに、親族の死亡をした遺族が、三菱マテリアル（旧三菱鉱業）に遺骨返還を求めた。しかし、「朝鮮半島出身者の遺骨はないものと推定される」との主張を繰り返したという。あれほどの都市機能を有した端島であったが、遺骨のゆくえが分からないのだ。

このように近代産業という視点から見れば、鉱員という現場労働者を確保し、その稼働率を上げることを第一義とする視点から、端島全体のシステムが構築さえていることを窺うことができる。三菱という一企業を批判するのではなく、近代産業といううねりのなかで、大量生産・大量消費を是として行動すること

84）後藤編（2015）p. 154、また高實（2016）は、1986年に長崎在日朝鮮人の人権を守る会（代表：岡正治）が、1925年からの「火葬認可証下付申請書」を入手したとして、その中から、朝鮮人と中国人のリストを作成した。

で、その行動規範が自らの身体に血肉化され、近代産業の構造がつくりだされてきたとするならば、労働者や消費者もまた、このシステムの加担者と言わざるをえない。産業の栄光の背後には影がある。それは、先の構造が生みだした「意図せざる結果」である。つまり、行動が構造を生み、構造が行動を規定するという二重性の中で、後期近代の運動の中で、生みだされた結果なのだ。それを隠蔽するのではなく、リスクとして認識し、後世に伝え、再発を防止するという姿勢が重要である。

4　おわりに

以上、軍艦島と高島の歴史を振り返りながら、そこを旅すること、とくにダークツーリズムとして捉えることの意義について考察を加えてきた。ダークツーリズムは「人類の悲しみを承継し、亡くなった方をともに悼む旅」という意味である（井出, 2014）。言葉を換えれば、「人類史における負の遺産」を「忌避すべきもの」や「忘却すべきもの」ではなく、「多くの人びとによって共有されるべきもの」という新しい観光資源として捉え直す態度と言える。そして、「共有されるべき記憶」という観点から、近年は、ダークツーリズムの対象を、記念碑や産業遺構などに拡大してきた。つまり、栄光の影に隠された「社会的秩序や規範に反する何ものか」を暴き出すのではなく、「人類の記憶」として「過去から学び、未来を拓く」という「学びと決意の旅」がダークツーリズムに求められている。

産業遺産が「遺産」として残っている理由については、松村（2018）は「一般的な捉え方をすると、取り壊す費用を捻出できるだけの土地利用、不動産経営の手立て、見通し、意欲がなかったから、そして差し当たって取り壊さなくてもそう困ることがなかったからだと言えるだろう」と指摘する（pp. 3-4）。積極的に取り壊す理由が見いだせなかったから、放置されたという理屈だ。鉱員は、故郷を失ったと言われる。ただし、閉山前でも、前述のように退職すれ

ば、故郷あるいは住環境を失ったことに変わりない。むしろ、三菱の立場からみれば、採炭が採算に合わなくなり、もはや使命を終えた島を新たに再開発する必然性もなく、廃棄されたと理解できる。使い捨ての論理である。

このように軍艦島には、近代産業を支えてきた多様な論理が産業遺産ないし廃墟というモノに刻印されている。軍艦島を、このような近代産業の論理の刻印を見いだす対象と理解し、未来の産業の論理（たとえば、SDGs）を検討する鏡とて捉えることが、ダークツーリズムの意義と言えるだろう。

光があるから陰がある、強い光ほど濃い陰影をつくる、闇が深いほど暁が近い、という。それゆえ、産業遺産を「正と負」や「生と死」さらには「自と他」が渾然一体となって織りなすタペストリーと考えることができる。そして、産業遺産が形成された経緯を立ち止まって考える。さらに、産業遺産を観る主体である自分が逆に周りから観られているという「二重性」を意識する。そのような態度あるいは「まなざし」を体得することがダークツーリズムである。本稿の考察が、これらの点を十分に反映できたかどうかは、いささか心許ない。ひとまずの試論として、筆を措くことにしたい。大方の批判を仰ぎたい。

謝　辞

本研究は、関西大学経済・政治研究所の「エキシビションとツーリズム研究班」および独立行政法人日本学術振興会の科研費20K01899、17K03909の助成を得た。

引用・参考文献

Hobsbawm, E. Age of Extremes: the Short Twentieth Century, 1914–1991. Michael Joseph, 1994（河合秀和訳『20世紀の歴史：極端な時代』三省堂（上・下）1996年；大井由紀訳『20世紀の歴史：両極端の時代』ちくま学芸文庫（上・下）2018年）.

Rebecca R. *A paradise built in hell: The extraordinary communities that arise in disaster*. Penguin, 2010（高月園子訳『災害ユートピア　なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房，2010）.

Shuman, M. H.（2007）The Small-Mart Revolution: How local businesses are beating the global

competition, Berrett-Koehler Publishers（毛受敏浩監訳『スマートモール革命：持続可能な地域経済活性化への挑戦』明石書店，2013）
阿久井喜孝・滋賀秀實『軍艦島実測調査資料集：追補版』東京電機大学出版局，2005.
阿久井喜孝『軍艦島海上産業都市に住む』岩波書店，2004.
新雅史『「東洋の魔女」論』イースト・プレス，2013.
井出明・鈴木晃志郎・深見聡・須藤廣「近代化産業遺産とダークツーリズム：産業社会の光と影を考える」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』Vol. 31, pp. 353–356, 2016.
伊藤大貴「長崎・軍艦島におけるダークツーリズム」『兵庫地理』Vol. 65, pp. 57–76, 2018.
池上重康「社宅を「街」としてとらえ、そこに育まれた文化を見いだすこと」『都市住宅学』Vol. 68, pp. 31–36, 2010.
今本啓一・下澤和幸・吉田夏樹「軍艦島の構造物群の劣化メカニズムとその学術的価値」『GBRC：General Building Research Corporation』Vol. 41, No. 1, pp. 25–32, 2016.
上野英信『地の底の笑い話』岩波新書，1967.
内田星美「明治後期民間企業の技術者分布」『経営史学』Vol. 14, No. 2, pp. 1–30, 1979.
岡田保良「軍艦島：産業革命遺産としての世界遺産登録」『コンクリート工学』Vol. 52, No. 10, p. 946, 2014.
NPO 西山夘三記念すまい・まちづくり文庫編『軍艦島の生活〈1952/1970〉：住宅学者西山夘三の端島住宅調査レポート』2015，創元社.
遠藤英樹「ダークツーリズム試論：「ダークネス」へのまなざし」『立命館大学人文科学研究所紀要』Vol. 110, pp. 3–22, 2016.
加地英夫『私の軍艦島記：端島で生まれ育ち閉山まで働いた記録』長崎文献社，2015.
木村至聖「地域の歴史の“闇”をまなざすのは誰か」『立命館大学人文科学研究所紀要』Vol. 111, pp. 37–59, 2017.
木村至聖「『観光のまなざし3.0』は産業遺跡をいかにデザインするか？」『観光学評論』Vol. 4, No. 1, pp. 43–55, 2016.
木村至聖『産業遺産の記憶と表象：「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学学術出版会，2014.
木村至聖「産業遺産の表象と地域社会の変容」『社会学評論』Vol. 60, No. 3 , pp. 415–432, 2009.
木村至聖「文化遺産保存の場における記憶のダイナミクス：社会学的記憶論の再検討を通じて」『京都社会学年報』Vol. 14, pp. 43–57, 2006.
古賀広志「地域デザイン学の確立を目指して：ZTCA モデルへの解釈主義的アプローチ」『地域デザイン学会誌：地域デザイン』Vol. 17, pp. 67–84, 2021.
後藤惠之輔・坂本道徳『軍艦島の遺産：風化する近代日本の象徴』長崎新聞新書，2005.

清宮理・羽渕貴士・佐野清史・内藤英晴・原田哲夫「軍艦島の歴史的なコンクリート護岸の現況調査」『コンクリート工学』Vol. 51, No. 12, pp. 975–983, 2013.
坂本道徳『軍艦島 離島40年：人びとの記憶とこれから』実業之日本社，2014.
柴田弘捷「「記憶」の無人島・軍艦島：廃鉱の島・長崎県端島」『専修大学社会科学研究所月報』Vol. 566, pp. 59–75, 2010.
高井多佳子「『東京電報』における柴四朗：「高島炭坑視察実記」」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要：史学編』Vol. 2, pp. 1–29, 2003.
髙實康稔「長崎と朝鮮人強制連行：調査研究の成果と課題」『大原社会問題研究所雑誌』Vol. 687, pp. 1–14, 2016.
西原純「わが国の縁辺地域における炭鉱の閉山と単一企業地域の崩壊」『人文地理』Vol. 50, No. 2, pp. 105–127, 1998.
野口貴文・岡田保良・今本啓一・加藤純「鼎談：軍艦島の保存に向けた展望と課題」『理大科学フォーラム（東京理科大学科学教養誌）』，Vol. 35, No. 4, pp. 18–21, 2018.
野田正彰『コンピュータ新人類の研究』文藝春秋社，1987.
原田保・古賀広志「地域デザイン研究の定義とその理論フレームの骨子」『地域デザイン学会誌：地域デザイン』Vol. 7, pp. 18–19, 2016.
深見聡「軍艦島の光と影：島の記憶の総てを」井出明監修『DARK tourism JAPAN：産業遺産の光と影』東邦出版，pp. 30–31, 2015.
中村亨一『海の上の建築革命：近代の相克が生んだ超技師の未来都市〈軍艦島〉』忘羊社，2020.
中村享一「明治期の三菱端島坑の形成過程：端島から軍艦島へ」『理大科学フォーラム：東京理科大学科学教養誌』Vol. 35, Vol. 4, pp. 2–8, 2018.
平井岳哉「三菱鉱業の石炭事業終息過程における雇用問題と三菱グループ」『獨協経済』Vol. 98, pp. 09–124, 2016.
松村秀一「新たな住宅循環が始まっている」『都市住宅学』Vpl. 103, pp. 3–8, 2018.
宮入興一「炭鉱都市の「崩壊」と地域・自治体：高島炭鉱閉山と自治体財政(2)」『経営と経済』Vol. 69, No. 3, pp. 1–44. 1989.
村串仁三郎「高島炭坑における納屋制度の解体過程：明治期高島炭坑の労務管理近代化過程の分析(下)」『経済志林』Vol. 42, No. 1, pp. 1–66, 1974.